

雁金

(色増艳夕映)

へ雁金を 結びしかやもきのふ今日 残る暑さを忘れてし肌につめ
たき風たちて ひるも音をなく蟋蟀に 哀れを添える秋の末 へ我
身一つにあらねども 憂にわけなきことにさへ へ露の涙のこぼれ萩
くもりがちなる空ぐせに 夕日の影の薄紅葉 梅も桜も色かへる
中に常磐の松のいろ へまだその時は卯の花の 夏のはじめに白河の
関はなけれど人目をば へ厭ふへだての旅の宿 飛び交う蝶に灯の
消えて若葉の 木下闇 へおもはぬ首尾にしつぽりと 結びし夢も
短夜に 覚めて恨みの明の鐘 へ空ほのぐらき東雲に 木の間がくれ
のほとぎす 鬢のほつれをかきあぐる 櫛の雫かしくか露か 濡れ
て嬉しき 朝の雨 へはや夏秋もいつしかに 過ぎて時雨の冬近く
散るや木の葉のばらと 風にみだるゝ萩すゝき へ草の主は誰ぞとも
名を白菊の咲出で、 匂ふ此家ぞ知られける。